

エッセイ大賞二月度応募原稿

人生の贈りもの

山田清範

トレコーダーを購入した。はじめでCDを聴いたときの音の美しさを、今も鮮明に覚えている。時が流れて、オフコースは解散して、二人の子供たちも成長した。かつて私と妻が耳を傾けていた小田和正の歌を、彼らも口ずさむようになった。新婚時代、妻と二人で聞いた歌を四人で聴きはじめている。つし家庭に流れる小田和正の歌、息子と娘はい曲ソロ活動をはじめた小田和正がみずから選曲したベストアルバムについて、妻が話題にしていたのを息子は聞いていたのだろう。

その夜、中華料理店の円卓を囲んで妻のさやかな誕生日のお祝い。三人からのプレゼント。私が差し出したCDに、妻は驚きの表情と私も急かされるように包装をとく。やがて自分が欲しかつたCDと知ると、妻はわつと歓声を挙げた。ありがとう、これ欲しかったんだ。妻は幼児のように無邪気な笑顔で息子と娘に幾度も幾度も礼を述べた。アルバイトに精を出さうになつた息子は、頬を赤らめて肯きながら、中華料理店のメニューを眺めていた。ポジションを勝ち取った、妻ゆずりの元気な

娘は、おにいちゃんも聞きたかつたんでしょ
と笑う。
そうだよ。悪びれもせず息子が言った。
この日、妻がうけとつたものは、素直に育
つた息子と娘の、成長した姿だった。それは
私たちに与えられた、かけがえのない人生の
贈りものに違いない。

終

（文中において小田和正氏の敬称は略させ
ていただきます）